犬の免疫介在性血小板減少症、免疫抑制剤からの減薬に成功

ホメオパシーセンター滋賀草津
今村　香

JPHMA認定ホメオパスNo.0775

JPHMA認定アニマルホメオパスNo.A0109

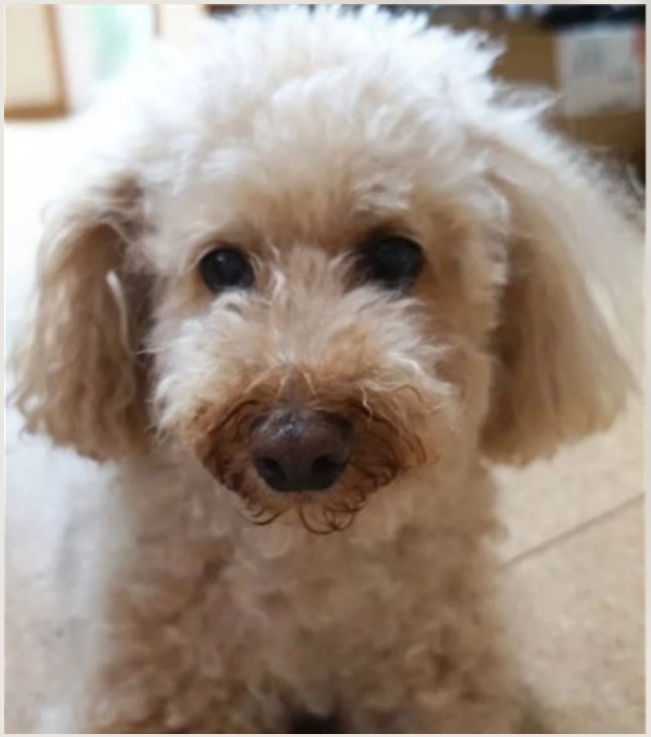
ZENメソッド修得認定No.0087

HMA認定ホメオパスNo.1623

RAH 13期・獣医師

クライアント

犬
トイプードル
Cちゃん
９歳
女の子
8.3Kg



©2023JPHMA

主訴

2022年３月

・免疫介在性血小板減少症と診断されたが、

血小板数値が安定しない。できれば投薬を減らしたい。

・よく吠えるようになった

©2023JPHMA

タイムライン

- 2013年1月生まれ
- ３か月の頃に寄生虫が便から排出
- １歳過ぎに避妊手術
- ストラバイト結晶の尿が出たこともあった
- 肘の内側が痒がったり、外耳炎を繰り返していた

- 2021年トリミング後に下痢、粘膜便となることが多かった。
  そのときの検査では異常は見られなかった

©2023JPHMA

一回目（2022年3月25日）

- 2023年2月21日トリミングの後に赤いあざを多数みつける。外耳に点状出血と、歯茎からの出血や尿に血が混じっていた。夜中に粘膜便があった。

- 動物病院にて、血液検査、エコーの検査をおこない、免疫介在性血小板減少症と診断された。

©2023JPHMA

血液検査データ

	2/21	2/24	3/3	3/10	3/17	3/24
血小板数	3	91	31	124	52	9
ALT		259	576	540	322	146
ALKP			1428	1492	782	346

©2023JPHMA

性格その他

- 怖いもの

  雷、大きな音、小さな子供

- 性格

  病気前　：　好奇心がある、怖がり、穏やか

  内服後　：　要求吠えが激しくなった、

  ウガウガ怒っていることが多くなった、

  家の前を通る人や車に良く吠える

©2023JPHMA

レメディの選択

- マザーチンクチャー（MT）クエカス　脾臓のサポート

　むるむるした粘液便、渇きがない、斑状出血、点状出血の見出しを選び、ボーニングハウゼンのレパートリー（TBR）から選択

　　Arn（ウサギギク）

　　Phos（リン）

©2023JPHMA

レメディーの選択のまとめ
（2022年３月から2023年8月まで）

血液や血管のカバーとして

Arn（ウサギギク）、Ham（アメリカマンサク）、

Cean（アメリカライラック）

Lach（ブッシュマスター）Crot-h（ガラガラヘビ）

Phos（リン）

血球破壊と梅毒マヤズムの傾向を止めるため　Merc-sol（水銀）

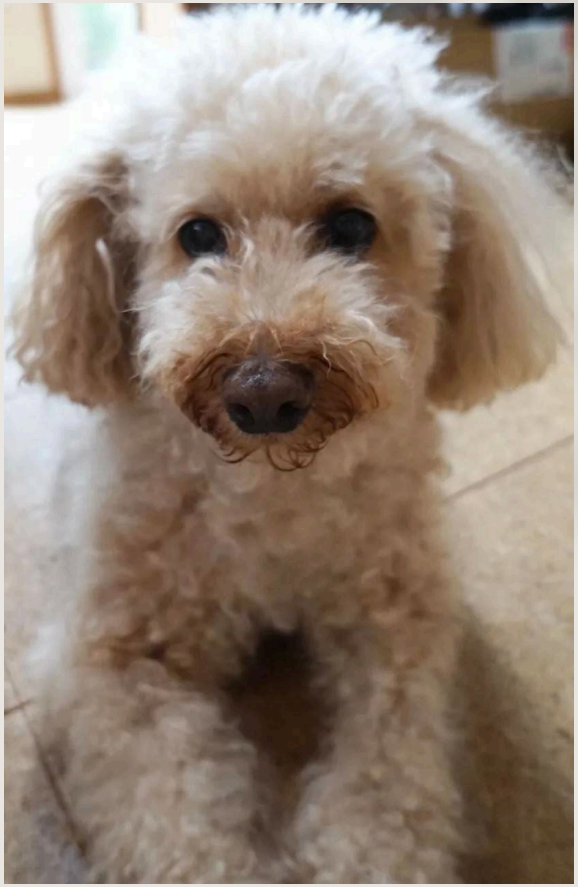
抗疥癬マヤズム治療と根本体質のため　Calc（牡蠣殻）

©2023JPHMA

現在

血小板数値　160K/μL
正常範囲148-484
投薬回数　無

身体の痒みが出てきている



©2023JPHMA

考察

- 今回の症例は、もともと薬剤でも血小板が増えず、増えてもすぐに減ってしまい安定しない難しい症例でした。
- ホメオパシーを使うことで、血小板の増加がおこり、正常範囲内に安定させることが出来ました。
- ホメオパシーの抗疥癬マヤズム治療によって、クライアントの自然治癒力が活性化し、免疫抑制剤やステロイドの内服をやめることが出来ました。
- 現在は、治癒の法則に則ったとおり、内面の問題から、外側の問題に移行しています。これから皮膚のケアを進めることで、起き上がっているマヤズムを休眠させ、クライアントの健やかな生活をサポートしていきます。

©2023JPHMA

第２４回　JPHMA コングレス発表原稿

＜演題＞　犬の免疫介在性血小板減少症、免疫抑制剤からの減薬に成功

PP1　タイトル
日本ホメオパシーセンター滋賀草津　自然派獣医師でもある今村　香です。よろしく願いします。

本日は、犬の免疫介在性血小板減少症で免疫抑制剤からの減薬に成功した症例を発表させていただきます。もう仕込み当時は、減薬中だったのですが、今は完全に休薬しており、血小板数値の推移を経過観察中です。そこに至るまでの 1 年半の道のりをまとめさせていただきました。

PP2　クライアントです。トイプードルの C ちゃん。9 歳の女の子です。体格は 8.3Kg とやや大きめの子でした。

PP　主訴です。
免疫介在性血小板減少症と診断されましたが、なかなか血小板数値が安定しません。できれば投薬を減らしたい、ということと、お薬を飲んでからよく吠えるようになったと困られていました。

PP　4　タイムラインです。

- 2013 年 1 月生まれ
- ３か月の頃に寄生虫が便からでてきました。
- １歳過ぎに避妊手術をしています。
  その後、大きな病気や手術はありませんでしたが、尿にストラバイト結晶が出たり、肘の内側が痒がったり、外耳炎を繰り返していました。

- 2021 年トリミング後に下痢、粘膜便となることが多かったそうで、そのときの検査では特に異常は見られませんでした。

PP　5

- クライアント家族は遠方のためにオンライン相談をおこないました。
- 2023 年 2 月 21 日。トリミングの後に赤いあざを身体に多数みつけました。外耳に点状出血と、歯茎からの出血、尿に血が混じっていました。夜中には粘膜便がありました。

- 動物病院にて、血液検査、エコーの検査をおこない、免疫介在性血小板減少症と診断されました。その時のお薬がプレドニゾロン、アモキクリア、シメチジン、ウルソ、セルセプトなどです。免疫抑制剤としてプレドニゾロン、セルセプトが出ました。

PP　6　血液検査データ
発病してから相談会までの血小板数値と肝機能の数値の推移です。2/21 から 5 回検査を実施しています。

血小板数値は、下は 3 から上は 124 と増減し、なかなか血小板数値が安定しませんでした。正常範囲は 148-484 といわれています。

ALT は肝細胞のアミノ酸代謝に関わる酵素で、アラニンアミノトランスフェラーゼの略です。ALT は肝臓に多く含まれていて、肝細胞が壊れると血液中に吐き出されるため数値が上がります。
参考基準値より高ければ、肝臓に障害（いわゆるダメージ）があることを示します。

ALPK は、アルカリフォスファターゼ（ALP）の略で、肝臓，骨，胎盤，小腸など生体の細胞膜に広く分布し、さまざまなリン酸化合物を分解する酵素です。肝臓、骨、ステロイド誘発でも影響を受け数値は上がります。そのほかにも、抗てんかん薬、副腎皮質機能亢進症、急性肝炎、慢性肝炎、糖尿病、胆嚢の粘液水腫、若い犬というだけで高かったり、骨の腫瘍に関連して増加します。3/3、3/10 ではステロイドを主に使っていたので、かなりの上昇が見られました。その後セルセプトという免疫抑制剤を追加してステロイド量を減らしたので数値は少し下がってきました。

PP　7　性格他
- 怖いもの

雷、大きな音、小さな子供
- 性格

病気前　：　好奇心がある、怖がり、穏やか。散歩は嫌いな子です
内服後　：　要求吠えが激しくなった、ウガウガ怒っていることが多くなった、家の前を通る人や車に良く吠えている

その後、1 か月から 2 か月に 1 回の割合で相談会を継続していただき、だんだんと血小板数値が上昇して正常範囲内におさまるようになり、かかりつけの先生の元、減薬から休薬に成

功していきました。

PP　8　レメディーの選択
一回目の処方は、血小板の破壊貯蔵には脾臓の関連があるので、脾臓の臓器をサポートするために、マザーチンクチャー（MT）クエカスを選びました。

そして、むるむるした粘液便、渇きがない、斑状出血、点状出血の見出しを選び、
ボーニングハウゼンのレパートリー（TBR）から選択したレメディーは
　　Arn/ウサギギク
　　Phos/リン　でした。

PP　9　レメディーの選択のまとめ
（2022 年 3 月から 2023 年 8 月まで）

しかし、血小板数値が増えなかったので、再度 TBR をし直しました。その時の見出しはほてりあえぐ、夜にイライラが強くでるので、基調として夜に悪化を選んでいます。その結果、Bry ブライオニアを選びました。他に、血液破壊は梅毒マヤズムの傾向から Merc マーキュリーソルを、蛇毒が血液の破壊に影響を与えるので、ラカシスとクロタラスホリダスを出しました。ステロイドによる内分泌への影響があるために pitu-gl 脳下垂体やアドレナリンのレメディーも追加しました。
その後、血小板数値は増加傾向となりました。。

もう少しで血小板数値が正常範囲内に治まるころに、C ちゃんの体格がトイプードルにおいては大きいこと、臆病で穏やかな性格でもあることということから、根本体質と抗疥癬マヤズム治療のために、Calc/牡蠣殻から作られたレメディーを追加しました。

Cal c 後に正常範囲に入り安心したところ、カットが出来ずに被毛がのびのびになっていたので、トリミングに行ったところ、出血斑が見つかり、耳のいぼから出血したり、背中に点状出血や痣が見つかっていました。そのまま採血して検査したところ、血小板数値が 0 に急低下していました。。

そのときはステロイドの減薬もしていたために、再度増量することになりました。

その後の処方では、Lach、Phos を中心に Merc を処方しました。Calc を加えることで範囲内に戻りました。
その後は、Calc を中心に、相談会のたびに起き上がる問題によってレメディを選択してい

ます。

PP10　現在の状態です。
血小板数値　160　K/μL　１μℓあたり１６万個あるという意味です。
正常範囲 148-484　１４万個から 48 万個
投薬回数　無　お薬は飲んでいません。

ただし、身体の痒みが出てきている

PP11　考察
免疫介在性血小板減少症は、犬で発症することが多いです。血小板表面に抗体が付着した結果、マクロファージ系の細胞によって処理されてしまい、血小板が減ってしまいます。身体の中で、血小板はなんらかの原因で血管が破れた場合にくっついて敗れた個所を防ぐ止血作用があります。ですので、血小板が減ったことで、臨床症状としては皮膚や粘膜の紫斑や消化器出血、鼻出血、血尿などの出血傾向がみられます。死亡率も 30%と高く、免疫抑制量（高容量）のステロイドが第一選択となり、輸血が必要な場合もあります。薬剤に反応しやすい場合と難治性の場合があり、経過の観察が様々です。その後ステロイドの容量を減らすためにシクロスポリン、セルセプトなどの免疫抑制剤を併用していきます。これらの薬剤を使用しても再発してしまい難治性の経過を取ると脾臓摘出がおこなわれます。
　C ちゃんは薬剤でも血小板数値の安定が難しかったケースで、レメディーと薬剤の併用から始めて、血小板数値の正常範囲内に安定させることに時間がかかりました。抗疥癬治療を加えてからは血小板が安定的に増加することが出来、動物病院の先生の元、減薬と休薬に成功しました。

飼い主さんからのお手紙

１年半前以上に発症して、酢ておりどを服用しながら相談会で提案いただいたチンクチャーやアルポなどをとってきてようやく血小板の数値が通常に戻り、ステロイドをやめました。カオリ先生には薬の副作用やホメオパシーのことだけでなく、しつけや食事の面でも相談に乗っていただき大変心強かったです。ありがとうございました。血小板が良くなったら身体の痒みが出てきてしまいましたが、毎日健やかに暮らせるように自然治癒力を引き出すホメオパシーをこれからも使っていきたいです。今後も引き続きよろしくお願いいたします。というお手紙をいただきました。
これで発表を終わります。ご清聴ありがとうございました